

第2 教育研究団体の意見・評価

① 日本理化学協会

(代表者 上村 礼子 会員数 約12,000人)

TEL 03-3944-3290

「物理基礎」

1 前 文

ここに記した意見は、共通テスト「物理基礎」本試験について、日本理化学協会各都道府県支部から寄せられた157件のアンケート回答に基づき、日本理化学協会大学入試問題検討委員会物理部会によって検討されたものである。アンケートの回答数は昨年度の共通テストの188件より減少したが、回答内容から共通テストへの関心の高さがうかがえる。

アンケート調査の集計結果(%)		令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度
(1) 問題の難易度	やや難しい	8	12	7	10	22
	適当である	66	81	77	84	74
	やや易しい	24	7	16	6	4
(2) 問題の設問数	やや多い	7	3	2	7	4
	適切である	90	94	94	92	95
	やや少ない	3	3	4	1	1
(3) 問題の形式	適切である	94	93	99	96	99
	適切ではない	6	7	1	4	1
(4) 分野のバランス	とれている	92	87	93	85	95
	とれていない	8	13	7	15	5

出題割合(%)	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度
力学	40	24	52	44	40
熱とエネルギー	8	36	8	8	30
波動	18	8	8	32	16
電気	26	32	24	16	8
原子	8	0	0	0	6
その他	0	0	8	0	0
平均点	37.56	30.40	28.19	28.72	24.78
標準偏差	8.76	10.35	9.65	12.29	10.56
受験者数	19,094	19,395	17,978	17,949	18,379

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

(1) 問題の難易度について

今年度の平均点は24.78点で、昨年度の28.72点から3.94点下がり、共通テストが始まって以来の最低となった。標準偏差（得点のばらつき）は10.56で、昨年の12.29と比べて小さくなった。

問題の程度（難易度）についてのアンケートでは「適当である」という回答が74%で、昨年の84%から10%減少した。「やや難しい」が22%で昨年度の10%から12%増加し、「やや易しい」という回答は4%で昨年度の6%から2%減少した。平均点も低くなっていることから、今年度は昨年度に比べて難しいという印象を受けたようである。

「物理基礎」の平均点は24.78点で、理科の「基礎を付した科目」（「物理基礎」、「化学基礎」、「生物基礎」及び「地学基礎」）の中で最も低かった。「物理基礎」は、他の「基礎を付した科目」を受験する生徒と比べ、学力の高い生徒が受験していると推測されることと、受験者が主に文系志望者であることを考えると、やや難しい印象がある。

全般に基本的・標準的な問題が多く、高校生が普段の授業をしっかり受けていれば正答を得ることができる問題となっている。思考力を見る出題もあり、難しい印象があるものの、適当な難易度となっている。共通テスト「物理基礎」の問題作成方針である、物理学の基本的な概念や原理・法則を活用し思考力・判断力・表現力等を発揮して解く問題として適切であったと評価する。

(2) 問題の設問数について

問題の設問数は、大問数で3題、小問数で14問、設問（解答）数は15であり、昨年度の17から2減少した。設問数については、「適切である」が95%、「やや多い」が4%、「やや少ない」が1%であった。おおむね適切な設問数であったと言える。

(3) 出題の形式について

出題の形式については、「適切である」99%、「適切ではない」1%であった。共通テストが始まって以来の高評価となった。

会話形式の出題はなく、問題文はおおむね適度な長さとなっており、受験者が問題の設定条件を読み解くのに時間がかかり過ぎないよう配慮され、考える時間は確保できたようである。基本問題を中心として問う良い出題であるという意見が多かったが、基本的な計算問題をもっと増やした方が良いという意見もあった。

(4) 出題分野のバランス・配点について

配点を加味した出題割合は、「力学」40%、「熱とエネルギー」30%、「波動」16%、「電気」8%、「原子」と「その他」が6%となっている。今年度は例年と比べ波動分野と電気分野が少なく、力学分野と熱とエネルギー分野が多く出題された。また、今年度はその他「エネルギーと利用」の分野からの出題はなかった。出題分野のバランスについては、バランスが「とれている」95%、「とれていない」5%であった。出題分野については、「バランスがとれている」という回答が95%で、昨年度の85%から10%増加した。

(5) 試験問題について

第1問 原子、力学、波動からなる小問集合である。標準的な問題が多く、普段の授業で努力した受験者が解答できる問題となっている。

問1 放射線の性質とその利用についての問題。原子分野は教科書の最後に配置されているため、学習に十分な時間がとれない場合が多いと思われる。物理基礎として日常生活との関わりから身に付けて欲しい知識であるという意見があった。

問2 同じ質量の三つの小物体を3通りの方法で打ち出した場合の最高点の高さを考察することで、力学的エネルギー保存則や仕事の内容について正しく理解できているのかを見る問題となっている。鉛直投げ上げ、斜方投射、斜面上の投げ上げの運動についての問題設定は簡潔であるが、それぞれの運動の特徴を理解し、それを活用する力を見るのに良い問題という意見が多かった。

問3 2つのスマートフォンからの音を使っただけの問題である。日常生活で見られる物理

現象を意識した出題であり、基礎・基本を確認するのに良い出題であった。

問4 ばねを伝わる縦波に関する問題。縦波の疎密と媒質の変位の関係の理解度を見るのに良い問題であるという意見が多かった。

第2問 滑車と二つのおもりを用いて重力加速度の大きさを測定する探究活動についての問題であった。探究活動に不慣れな受験者にとって、条件設定を理解するのに時間がかかり、難しく感じたと考えられる。おもりの加速度と重力加速度の関係はリード文に与えられていたが、運動方程式をたてて加速度を求めるという基本的な出題も必要であったのではないかという意見があった。また、探究活動についての出題は、受験者にとっては実験条件を読んで理解するのが難しいという意見もあった。

問1 二つのおもりの質量が等しい場合の糸の張力の大きさを問う問題。等速直線運動をする物体に働く力の合力は0であるという力学の基本事項を問う良問であるという意見が多かった。

問3、問4、問5 二つのおもりのうち一方のおもりに軽い質量のおもりをのせ、おもりの質量が異なる場合の運動の加速度を調べ、得られた加速度から重力加速度を求める探究的な課題となっている。問5に「加速度の大きさを a 」とあるが、何の加速度なのかを明確に示した方が良いという意見が多くあった。

問3 問1で等速直線運動について出題しており、重複を避けた出題にして欲しかったという意見があった。

問4 グラフを使って二つの量の関係性を見るという、良い出題であるという意見がある一方、問2の等加速度運動と重複しているのではないかという意見もあった。

問5 問4の実験結果を用いて、おもりの加速度から重力加速度を導く問題で、思考力を見るのに良い問であるという意見が多かった。一方、問4を正答しないと解答できない間になっており、文系進学希望の受験者にとっては難し過ぎるのではないかという意見もあった。

第3問 水熱量計を用いて、液体中の抵抗（電熱線）に電流を流し、発熱による温度上昇から、液体の比熱（比熱容量）を測定する実験についての問題である。多くの学校で行われている実験を題材として出題するのは、良い傾向であるという意見が多かった。

問1 熱と温度に関する基本的な用語の意味・定義を確認する問題。熱容量と物体の温まりやすさ・冷めやすさについて触れているところが良いという意見があった。

問4 温度変化を表す実験データを与え、電流の流れている抵抗（電熱線）から発生した熱量と液体の比熱を求める、電気分野と熱エネルギー分野の融合問題。実験データから判断して計算する、学力を見るのに良い問題であるという意見が多かった。

問5 比熱を求める実験での誤差とその誤差を小さくする方法についての問題。単純な暗記では解答することができず、思考力を見るのに良い問題であるという意見が多かった。センター試験を含め、たびたび出題される内容であるが良い問題であった。

3 総評・まとめ

今年度の共通テストは、物理と日常生活との関わりについての出題もあった。バランスの取れた良い出題であった。また、学習指導要領の目標「日常生活や社会との関連を図りながら物体の運動と様々なエネルギーへの関心を高め、目的意識をもって観察、実験などを行い、物理学的に探究する能力と態度を育てるとともに、物理学の基本的な概念や原理・法則を理解させ、科学的な見方や考え方を養う。」にものつとった出題であった。全体に難易度、出題数は適切で、読解力に関わるような対話形式での出題はなくなり、高等学校の授業で行われている実験を題材とした出題が見られ

た。基本的な概念や原理・法則の理解を問うとともに「思考力・判断力・表現力等」を問い、実験条件を工夫した探究的な課題についての出題、学習の過程を意識した問題の出題も見られた。

4 今後の共通テストへの要望

「物理基礎」は、主に文系の大学を志願する生徒が受験する。加えて、物理学の基本的な概念や原理・法則の理解が必要とされる理系の大学を志願する生徒も受験する。各高校の状況から見て「物理基礎」は、それ以外の「基礎を付した科目」（「化学基礎」、「生物基礎」及び「地学基礎」）を受験する生徒と比べ、学力の高い生徒が受験していると推測される。こうした生徒が受験する試験としては、やや難しく感じられるものの、おおむね難易度は適当であり、来年度もこの程度の難易度を維持していただきたい。また、対話形式の問は、文章量が多くなる傾向があるので、出題する場合は考慮していただきたい。

『物理』

1 前 文

ここに記した意見は、共通テスト「物理」本試験について、日本理化学協会各都道府県支部から寄せられた 203 件のアンケート回答に基づき、日本理化学協会大学入試問題検討委員会物理部会によって検討されたものである。回答数は昨年度の 280 件から減少したが、回答内容から昨年度と同様に共通テストへの関心の高さがうかがえる。

アンケート調査の集計結果(%)		令和 3 年度	令和 4 年度	令和 5 年度	令和 6 年度	令和 7 年度
(1) 問題の難易度	やや難しい	35	9	4	6	15
	適当である	60	75	70	84	78
	やや易しい	5	16	26	10	7
(2) 問題の設問数	やや多い	18	5	5	4	17
	適切である	77	85	92	89	82
	やや少ない	5	10	3	7	1
(3) 問題の形式	適切である	91	90	92	92	96
	適切ではない	9	10	8	8	4
(4) 分野のバランス	とれている	82	70	79	85	92
	とれていない	18	30	21	15	8

出題割合(%)	令和 3 年度	令和 4 年度	令和 5 年度	令和 6 年度	令和 7 年度
力学	30	35	40	30	35
熱とエネルギー	5	5	5	5	18
波動	21	10	20	30	12
電気	30	30	30	30	30
原子	14	20	5	5	5
その他	0	0	0	0	0
平均点	62.36	60.72	63.39	62.97	58.96
標準偏差	18.82	19.22	22.72	22.82	22.72
受験者数	146,041	148,585	144,914	142,525	144,761

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

(1) 問題の程度（難易度）について

今年度の平均点は 58.96 点で昨年度の 62.97 点から約 4 点下がった。これは、共通テストが始まって以来の最低点となった。昨年と比較して「やや難しい」が 9%も増加したことから、今年度の出題は易しくはなかったと言える。標準偏差（得点のばらつき）は 22.72 で、昨年度の 22.82 と同程度であった。全体を通して、難易度が高過ぎる問題も低過ぎる問題も見当たらなかった。

問題の程度（難易度）についてのアンケートでは、「適当である」が 78%、「やや難しい」が 15%、「やや易しい」が 7%である。昨年度と比べると「やや難しい」が 6%から 15%と大幅に増加し、「やや易しい」が 10%から 7%に減少した。今年度の試験は、難しいという印象を持ったようである。

(2) 問題の設問数について

問題の構成及び分量は、大問数で4題、小問数で23問、設問（解答）数で24であった。昨年度は、大問数で4題、小問数で20問、設問（解答）数で22であったので分量はやや増加した。問題の設問数についてのアンケートは、「適切である」が82%、「やや多い」が17%、「やや少ない」が1%であった。昨年度と比べると、「適切である」が89%から82%に7%減少し、「やや多い」が4%から17%に増加し、「やや少ない」が7%から1%に減少した。

(3) 出題の形式について

今年度は会話文形式の出題がなく文章量が減り、状況理解も容易な出題で受験者はじっくりと考える時間が確保できたようである。計算は概算で解答を導けるように選択肢の工夫がされていたり、探究過程について問う出題でグラフや表を解析したりする能力を見る問が増えていることは評価できる。

また、複数の選択肢を組み合わせることで一つの解答を導く「組合せ解答問題」が昨年度の共通テストでは6問、今年は7問であり、設問数は微増した。「組合せ解答問題」は、今年度は部分点が設定されていなかったが、生徒の思考の過程を見る上で良い出題である。

出題の形式についてのアンケートでは、「適切である」が96%、「適切ではない」が4%であり、共通テストが始まって以来の高評価となった。

(4) 出題分野のバランスについて

配点を加味した出題の割合について「力学」35%、「熱とエネルギー」18%、「波動」12%、「電気」30%、「原子」5%で、全分野から万遍なく出題されており、適切であったと考えられる。出題分野のバランスについてのアンケートでは、バランスが「とれている」が92%、「とれていない」が8%であった。昨年度の本試験では「バランスがとれている」が85%だったことから7%増加しており、共通テストが始まって以来の高評価となっている。

(5) 試験問題について

第1問 熱とエネルギー、力学、電磁気、原子の各分野から出題されている小問集合の問。基本的な事項を正しく理解した受験者が解答できる問で、第1問としては、適切な難易度であると考えられる。

問1 注射器に入れた空気の山頂とふもとでの状態変化についての問題。ボイル・シャルルの法則を理解していれば解答できる基本的な問題であった。

問2 万有引力の法則から地球の質量を求める問題。イの地球の質量の計算は、有効数字が1桁であることと指数から概算で解答できる。概算は大切な考え方であり良問であるという意見がある一方、きちんと計算をすると時間がかかるので出題に工夫が欲しかったという意見もあった。

問3 剛体に働く3力の合成に関する問題。3力のうち平行でない2力を合成した力は、もう一つの力と平行で逆向きになる。2次試験で問われることはほとんどないため、教科書でも見落としてしまいがちな内容である。剛体に働く力の合成の意味を正しく理解していれば容易に解答できるため、生徒の考え方の深さを見るのに良い問題であるという意見が多かった。

問4 電磁場における荷電粒子の運動に関する問題。電場・磁場から電子に働く力の性質から電子の速さを問う問題である。必要最低限の情報を基に定性的に思考する良問であるという意見が多かった。一方、複数の要素を基に思考する問を第1問として出題するのは、難易度が高かったと言える。

問5 電子線が干渉して強めあうブラッグの条件についての問題。原子分野の基本的な出題。エの解答のためにはウが必要なので、ウを聞く必要はないという意見があった。

第2問 単振り子の周期を精度良く測定し、重力加速度を求める探究活動に関する問題。

- 問1，問2 単振り子の小球に働く力と小球の位置と角振動数を求める問題。基本的な内容ではあるが，本質的に理解できているかどうかを問う良問であるという意見がある一方，公式を暗記していれば解答できるので，式の導出などの工夫が欲しかったという意見もあった。
- 問3 単振り子の周期を求める際の実験誤差についての問題。知識だけでなく実験の状況を考える力が問われており科学的な思考力を見るのに良い問題である。実験をした経験がなくても解答に導く誘導に従って実験方法を考察させることができる良問であるといった意見が多かった。
- 問4 オシロスコープの波形から単振り子の周期を読み取る問題。高校ではストップウォッチで周期を求めることが多いが，レーザーと光センサーを使う設定は，実験データと運動の様子を関連付けて理解できているかを問うており，思考力を見るのに良い問題である。
- 問5 地球の極と赤道上での重力加速度の大きさの違いを問う問題。遠心力が緯度により異なることや，重力が万有引力と遠心力の合力であることを理解した上で考察する必要がある，知識と思考力を見るのに良い問題であるという意見が多かった。
- 第3問 Aは気体の状態変化についての問題，Bは波の干渉についての問題。A，Bと分けたことによって，より広い分野からの出題が可能になったと思われる。
- 問1 熱力学第一法則と状態方程式についての問題。グラフを読み取る力と基本法則が理解できていれば解答できる。
- 問2 $P-V$ グラフから $T-V$ グラフを描く問題。圧力，体積，温度の関係の理解し，グラフ化する表現力を問う良問であるという意見が多かった。正しく理解できている受験者にとっては解答しやすかったと思われる。
- 問3 理想気体の状態変化において始めと終わりは同じで過程が異なる場合についてエネルギー，仕事について問う問題。グラフから変化過程を読み取り，熱力学第一法則に基づいて仕事や熱について定性的に考察する良問であった。適切な難易度で，基礎基本を確認する問題として良い出題の仕方だったという意見が多かった。
- 問4 変位と時間のグラフから，波の振動数と振幅を求める問題。波の基本を理解しているかを確認する問題であった。
- 問5 水面波の干渉についての問題。二つの波の合成波の振動の様子から，一方の波による振動の様子を考察する出題であった。こうした出題は少なく，思考力を見るのに良問であった。
- 問6 二つの波源から出た波が重なり，最も強め合う条件についての問題。二つの波源からの時間差と経路差を組み合わせる問う出題で，思考力を見るのに良い問題であるという意見が多かった。一方，干渉についての本質的な理解をしていなくとも問題文を読むと代数計算で解答することができるため，思考力を見る問題ではないという意見や，問題文に与えられている数式の成り立ちを探ろうとすると時間がかかってしまうので共通テストとしては適切ではないという意見も多かった。
- 第4問 磁場中のRC回路及びRL回路において，導体棒を一定の速さで動かしたときの電磁誘導に関する問題。電気回路の基本知識から，電磁誘導，エネルギー，自己誘導に至るまで電磁気の現象を総合的に問う良問であった。一方，電磁誘導の回路にコンデンサーやコイルが入った問題は，大学入試では比較的難易度の高い二次試験で出題されることが多く，共通テストで出題するには難易度が高いのではないかという意見があった。
- 問1，問5 レール上を動く導体棒に生じる誘導起電力に関する電磁誘導の問題。基本法則を理解していれば解答できる基本的な問であった。
- 問2，問6 過渡現象は，コンデンサーが含まれる場合とコイルが含まれる場合の違いを問う

ている。過渡現象は教科書では参考の扱いである。回路を流れる電流の時間変化ではなく、導体棒に働く外力の大きさの時間変化をグラフにして、グラフの概形から選択させる問にした点が工夫されているという意見が多かった。

問3 回路に関するエネルギー保存についての問題。電気分野が苦手な生徒や理解不足な生徒も多いが、エネルギーの視点で電気現象を捉える力を見るのに良問である。

問4 コンデンサーの放電に関する問題。物理現象を正確に理解し、考える力を見るのに良問であるという意見が多かった。

問7 コイルの自己インダクタンスについての問題。自己インダクタンスと誘導起電力との関係及びグラフの接線の傾きが表すものの両方が理解できていないと解答できない。よく工夫された良問であった。

3 総評・まとめ

今年度の共通テストでは、実験方法や実験結果についての検討、グラフの解釈や実験誤差についての考察など、探究活動や観察、実験を基に物理現象について思考する問題が出題された。学習指導要領の目標にものつとった出題であり、今後の授業の指針となるものであった。アンケートには、探究的に授業を行うことの必要性を感じた、思考力を問う出題であるにもかかわらず難しくなり過ぎず良問であったという意見も多かった。また、物理の基本的な概念や原理・法則を正しく理解していれば解答できる問もあり、バランスの取れた出題であったと言える。

4 今後の共通テストへの要望

理科の2科目選択の組合せを見ると「物理・化学」68.3%、「化学・生物」22.2%となっている。各高校の状況から見て、「物理」は、理系の大学を志願する、学力の高い生徒が「物理」を選択していると推測される。こうした生徒が受験する試験として、今年度の出題は、平均点や得点分布から見ても適切な難易度であると言える。今後も、現役の高校生が普段の授業をしっかり受けていれば正答を得ることができる出題が継続されることを希望する。

原子分野の出題については、原子分野は学年末に学習するケースが多く、共通テストまでの期間に生徒が学習内容を深く理解し、定着させるまでの時間を取りにくい。したがって、今後も、原子分野からの出題は基本的な問題にしていきたい。

② 日本物理教育学会

(代表者 新田 英雄 会員数 約1,000人)

TEL03-3816-6207

「物理基礎」

1 前 文

「物理基礎」は、高校理科における必修科目の一部に位置づけられ、共通テストの「物理基礎」の問題は、この点を踏まえ、多種多様な志望を持つ大学受験者にとっての、高校理科の根幹部分としての基礎的な学習成果が問われる問題である。この点に関しては、大学入試センターウェブページの「大学入学共通テストの仕組み・運営」の冒頭部分に、「大学入学共通テストは、大学に入学を志願する者の高等学校段階における基礎的な学習の達成の程度を判定することを主たる目的とするものであり、(後略)」と明記されていることと合致している。今年度も、この認識に立ち、望ましい問題形態と内容について、本学会会員に対するアンケート調査結果を基に検討を行った。

(1) 回答者の属性

今年度のアンケート調査も昨年度と同じくグーグルフォームを用いる方法で行い、昨年度よりも13名少ない会員66名から回答を得た。回答者の年齢分布及び所属等を表1と表2に示す。

表1 年齢分布

年代	①～34	②35～44	③45～54	④55～64	⑤65～
人数	8	12	19	17	10

表2 所属等(「高校」は、中高一貫校を含む。「セ行」は、「教育センター／教育行政」の略である。)

分類	①国大	②私大	③短大	④高専	⑤高校	⑥セ行	⑦小中	⑧企業	⑨学生	その他
人数	6	3	0	0	52	0	0	2	1	2

(2) アンケート回答集計結果

今年度のアンケート調査の項目は、昨年度と同じである。先に各問の「難易度」「優劣度」について回答を求めた。続いて、問題全体への評価として、「問題の量」，「出題分野の偏り」，教科書レベルの学習を行った高校生に対しての「難易度」「平均点の予想」「自然理解・科学的自然観育成への貢献度」，「観察実験による科学的探究能力・態度の育成への貢献度」，「主体的・対話的で深い学びへの授業改善への貢献度」及び「総合評価(優良度)」について、回答を求めた。その結果を表3～9に示す。また、全体の難易度と総合評価は、10年間の変化を表10と表11にまとめた。

表3 問題量

問題量 (N=66)		
	人数	割合(%)
多すぎる	3	4.5
やや多い	17	25.8
適量	43	65.2
やや少ない	3	4.5
少なすぎる	0	0.0

表4 分野の偏り

出題分野 (N=66)		
	人数	割合(%)
偏りが大きい	3	4.5
特に問題はない	57	86.4
大変適切である	6	9.1

表5 分野の増減

出題分野の改善意見 (%) N=66			
	出題を増やす	出題を減らす	無回答
(1)運動とエネルギー	0.0	4.5	95.5
(2)物理現象とエネルギー	1.5	0.0	98.5

表 6 各問及び全体の難易度

各問および全体の難易度（％） N=66					
	易	やや易	適当	やや難	難
第1問	0.0	6.1	75.8	16.7	1.5
第2問	0	0	50	47	3
第3問	0.0	1.5	81.8	16.7	0.0
全体	0.0	0.0	54.5	42.4	3.0

表 7 各問の優劣度

各問題の優劣度（％） N=66					
	劣	やや劣	普通	やや優	優
第1問	0.0	1.5	65.2	30.3	3.0
第2問	0.0	13.6	43.9	37.9	4.5
第3問	0.0	3.0	63.6	31.8	1.5

表 8 平均点の予想

平均点予想 (N=66)		
人数	割合(%)	
～27	13	19.7
28～32	31	47.0
33～37	20	30.3
38～42	2	3.0
43～	0	0.0

表 9 観点別及び総合評価

観点別および総合評価 (N=66)					
	劣	やや劣	普通	やや優	優
自然観	0	10	34	21	1
観察実験	0	4	27	32	3
深い学び	2	9	42	11	2
総合評価	0	6	35	23	2

表 10 全体の難易度の 10 年間の変化

年	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025
全体	適当	適当	適当	適当	適当	適当	適当	適当	適当	適当・やや難
	66%	61%	59%	65%	73%	60%	64%	66%	62%	55%・42%
高校関係	適当	適当	適当	適当	適当	適当	適当	適当	適当	適当・やや難
	64%	61%	57%	59%	69%	50%	62%	65%	60%	54%・42%
大学高専	適当	適当	適当	適当	適当	適当	適当	適当	適当	適当・やや難
	66%	69%	72%	100%	79%	92%	63%	63%	70%	44%・56%

表 11 総合評価の 10 年間の変化

年	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025
全体	普通	普通	普通	普通	普通	普通・やや優	普通・やや優	普通・やや優	普通・やや優	普通・やや優
	57%	60%	59%	43%	59%	39%・49%	42%・42%	55%・27%	44%・38%	53%・35%
高校関係	普通	普通	普通	普通	普通	普通・やや優	普通・やや優	普通・やや優	普通・やや優	普通・やや優
	62%	69%	70%	53%	62%	42%・48%	38%・44%	44%・35%	43%・40%	54%・31%
大学高専	普通	普通	普通	やや優	普通	普通・やや優	普通・やや優	普通・やや優	普通・やや優	普通・やや優
	51%	46%	50%	100%	57%	33%・58%	75%・13%	74%・21%	60%・10%	56%・44%

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

(1)問題量・分野のバランス

問題量については、「適量」が 65% (71%/括弧内は昨年度，以下同様) と最多回答であるが，この 3 年間減少し続け，「多すぎる＋やや多い」が増えている。

「分野の偏り」については，「問題なし」が 86% (77%) と昨年度より増加し，一昨年度とほぼ同じである。

(2)難易度

「適当」とする回答が 55% (62%)，「やや難」が 42% (30%)，「やや易」が 0% (8%) であった。昨年度は「易」「難」は 0%だったが，今年度は「難」が 3%だった。最多回答は「適当」ではあるものの，この 3 年間では最も少なくなり，「やや難」と「難」が増え，問題が難化しているという評価である。

(3)平均点

アンケート回答における予想平均点については，「28～32 点」が最多回答で 47% (51%)，「33～37 点」は 30% (39%)，「～27 点」は 20% (4%) である。昨年度よりも平均点を低く予想してはいたものの，実際の平均点は 24.78 点と予想以上に低くなっている。アンケート回答者が感じている難化度合い以上に，受験者にとっては難化していたと言えよう。

(4)学習効果への貢献度

「自然理解・科学的自然観育成への貢献度」については，「普通」とする回答が 52% (44%，50%/括弧内は左が昨年度，右が一昨年度，以下同様)，「やや優＋優」33% (43%，37%)，「やや劣＋劣」15% (13%，13%) であった。「観察実験による科学的探究能力・態度の育成への貢献度」については，「普通」とする回答が 41% (30%，46%)，「やや優＋優」53% (60%，26%)，「やや劣＋劣」は 6% (10%，26%) であった。

昨年度は，共通テストとなった初年度に次ぐ高い評価だったが，今年度は下がっている。昨年度と同様，実験を題材としてはいるものの，第 2 問のように加速度が文字式で始めから与えられていることへの違和感が評価に反映されている可能性がある。

(5)主体的・対話的で深い学びへの授業改善への貢献度

「普通」とする回答が 64% (46%，50%)，「やや優＋優」20% (35%，16%)，「やや劣＋劣」17% (19%，35%) であった。今年度も「普通」が最多回答で昨年度よりも増えたが，「やや優＋優」が減少した結果である。

(6)問題の総合評価

総合評価については，「普通」53% (44%，55%)，「やや優＋優」38% (44%，30%)，「やや劣＋劣」9% (11%，16%) という結果である。昨年度よりも「やや優＋優」が減り，「普通」が増えている。

(7)各問について

表 6 に示したように，各問の難易度はどれも最多回答は「適当」であるが，難易の広がりまでみると，第 2 問は「やや難＋難」が 50%であり，回答者の半数は適当ではないと考えている。また，表 7 に示したように，各大問の優劣度は，「普通」が最多回答である。第 1 問は，昨年度よりも「やや優＋優」が増えていて，第 2 問と第 3 問は，昨年度よりも「やや優＋優」は減っている。自由記述の意見をまとめると以下の通りである。

第 1 問 問 1 については，中性子線の透過力まで問うのは物理基礎においてはやりすぎではないかという意見が多数見られた。問 2 は力学的エネルギー保存の法則や放物運動などを総合的に

理解しているかを定性的に問われた問題で、物理現象を正しくイメージできているかどうかで差がつく良問であるという声が非常に多かった。問4は縦波における各媒質の変位と疎密の関係についての理解度を測る問題であり、良問であるという意見も多く見られた一方で、問全体の文章の長さも含めて、物理基礎で問うのは難易度が高すぎるのではないかという指摘も複数あった。

第2問 アトウッドの装置を題材とした力と運動の関係についての問題であり、等速直線運動と等加速度運動のどちらが起こるかを正しくつかめているかどうかによって差がつく点などを含めて、全体的には良い問題であると評価されていた。ただし、加速度が与えられているとはいえ、はじめから二物体の運動について問われていることや、様々な要素を取り入れた題材を用いている分、問題設定が複雑で問題文が長い上にグラフの意味を考えなければならない問題も含まれていることなどから、物理基礎の受験者が短い試験時間内に解くにはハードルが高いという意見も少なくなかった。それぞれの小問ごとというよりは、大問全体での文章量や難易度について、課題のある問題だったと言える。

第3問 抵抗に電流を流して液体を温度上昇させる実験についての問題で、中学校の教科書などに類似した実験が掲載されていて、多くの受験者にとってなじみがある題材が問題となっていた点も含めて良問であるという評価が多かった。実際に実験したことのある受験者が有利な問題になっていることも歓迎できるだろう。問5は比熱の誤差を定性的に考えさせる問題で、暗記に頼っていてはできない点で良問と言えよう。

3 総評・まとめ

教科書で見かけるような実験を、探究的に論理展開し、思考力を必要とするような問いにまとめ上げてある問題が多かった。また、実際に授業で実験を実施していれば、その経験を活かすことができそうな問題もあり、このような出題を継続することで、実験の重要性を高校生に伝えるメッセージになり、文系理系を問わず全国の高校生が、物理の授業で実験の実施される機会が増え、探究的に学ぶ機会が普及していくことに繋がると期待できるかもしれない。

一方、受験者の中心となる文系の受験者にとっては難易度が高すぎたことは実際の平均点からも明らかである。はたして、マークセンスによる30分間の試験で、物理を専門的に学習してきたとは言えない生徒に対して、公平に思考力を計るような出題は可能なのだろうか。特に第2問の出題は、滑車を通した糸でつながった2物体の運動が題材で、一方の物体は分裂までする。本来ならば大問の(1)や(2)として求めさせるべき加速度を問題文中で式として与え、大問の途中から問題が始まるような構造になっている。別の表現をするならば、もともと小問7問構成で構想した大問であったが、力学以外の出題分野を確保するため、そして30分という短い試験時間に対応するために、小問数を削る必要があり、かつ難易度は確保したいという狙いから、問1と問2を削除し、その対応として加速度の式を問題文中で与えたように見える問題である。

公開されている「問題作成方針」では、基礎を付した科目と、そうでない科目（いわゆる上位科目）では差異が設けられている。だが、今年度の問題を見ると、その差はあまりなく、上位科目と同じ方針で作問されているように感じられる。

「物理基礎」は標準単位数2単位と時間的制約が大きく、現場では幅広い内容を教えながら、各々の物理現象について、実験観察などを通じて本質的な理解をさせるような授業づくりに大変苦慮しているのが現状である。今回の出題からは、そのような現状が理解されているとは残念ながら感じられなかった。

4 今後の共通テストへの要望

来年度以降も，対話形式の問題が出題されないようにして頂きたい。生徒同士の間違いを含む対話を題材とするなど，作問の仕方によっては対話形式もあり得ると思うが，30分という物理基礎の試験時間内での実現は困難だろう。

また，昨年度の意見書では以下を要望した。

出題方針にある「日常生活や社会との関連を考慮」することや「身近な課題等について科学的に探究する問題」を検討することそれ自体は歓迎するが，その方針のために，出題分野が偏り受験者にとって成績が実力ではなく運に左右される結果となったり，今後身近なテーマが「ネタ切れ」となり無理をした出題がされたりすることが懸念される。

結局のところ，これも30分という試験時間と問題作成方針との関係から生じる懸念である。これは，今年度の第2問のように式を与えても解決はしない。

今年度「物理基礎」は，4つの基礎を付した科目（出題範囲）の中で，もっとも平均点が低くなった。「科目による受験者層の能力の違いが，平均点に適切に反映されること」を毎年希望してきたが，今年度は特に強く希望する。科目（出題範囲）による受験者層の能力の違いは，他教科の成績を比較することで推定可能であろう。

共通テストは，高校における今後の「物理基礎」の授業内容をはじめとした，中等教育現場の学習や指導の方向に極めて大きな影響力を持つ。『情報Ⅰ』の試験も今年度から実施され，受験者の負担は大きくなっている。大学入学共通テストとしての全体のバランスを見ながら，物理基礎の「問題作成方針」の見直しも含めご検討いただきたい。

『物理』

1 前 文

共通テストの「物理」の問題は、多種多様な志望を持つ大学受験者にとって、高校における「物理」の基礎的な学習成果を問われる問題であると認識する。この点に関しては、大学入試センターウェブページの「大学入学共通テストの仕組み・運営」の冒頭部分に、「大学入学共通テストは、大学に入学を志願する者の高等学校段階における基礎的な学習の達成の程度を判定することを主たる目的とするものであり、（後略）」と明記されていることと合致している。今年度も、この認識に立ち、望ましい問題形態と内容について、例年に準じた本学会会員に対するアンケート調査結果を基に、検討を行った。

(1) 回答者の属性

今年度のアンケート調査も昨年度と同じくグーグルフォームを用いる方法で行い、昨年より17名少ない会員87名からの回答を得た。回答者の年齢分布および所属等を表1と表2に示す。年齢分布は昨年度比で大きな変化はなく、所属は高校（中高一貫を含む、以下同様）は14名減ったものの、高校の割合は75%と昨年度と同程度である。

表1 年齢分布

年代	①～34	②35～44	③45～54	④55～64	⑤65～
人数	11	15	24	22	15

表2 所属等（「高校」は、中高一貫校を含む。「セ行」は、「教育センター／教育行政」の略である。）

分類	①国大	②私大	③短大	④高専	⑤高校	⑥セ行	⑦小中	⑧企業	⑨学生	その他
人数	9	4	0	0	65	0	0	2	1	6

(2) アンケート回答集計結果

アンケート調査の項目は、例年通りである。先に各問の「難易度」「優劣度」について回答を求めた。続いて、問題全体への評価として、「問題の量」，「出題分野の偏り」，教科書レベルの学習を行った高校生に対しての「難易度」，「平均点の予想」，「自然理解・科学的自然観育成への貢献度」，「観察実験による科学的探究能力・態度の育成への貢献度」，「主体的・対話的で深い学びへの授業改善への貢献度」および「総合評価（優良度）」について、回答を求めた。その結果を表3～9に示す。また、全体の難易度と総合評価は、10年間の変化を表10と表11にまとめた。

表3 問題量

問題量 (N=87)		
	人数	割合(%)
多すぎる	3	3.4
やや多い	37	42.5
適量	46	52.9
やや少ない	1	1.1
少なすぎる	0	0.0

表4 分野の偏り

出題分野 (N=87)		
	人数	割合(%)
偏りが大きい	1	1.1
特に問題はない	73	83.9
大変適切である	13	14.9

表5 分野の増減

出題分野の改善意見 (%) N=87			
	出題を増やす	出題を減らす	無回答
力学	1.1	0.0	98.9
熱力学	0	0	100
波動	0	0	100
電気・磁気	0	0	100
原子	1.1	0.0	98.9

表 6 各問および全体の難易度

各問および全体の難易度（％） N=87					
	易	やや易	適当	やや難	難
第1問	0.0	4.6	73.6	20.7	1.1
第2問	0.0	13.8	78.2	8.0	0.0
第3問A	0.0	12.6	79.3	8.0	0.0
第3問B	0.0	4.6	50.6	43.7	1.1
第4問	0.0	1.1	59.8	37.9	1.1
全体	0.0	2.3	57.5	39.1	1.1

表 7 各問の優劣度

各問題の優劣度（％） N=87					
	劣	やや劣	普通	やや優	優
第1問	1.1	4.6	51.7	40.2	2.3
第2問	0.0	9.2	44.8	33.3	12.6
第3問A	1.1	2.3	69.0	23.0	4.6
第3問B	0.0	17.2	49.4	28.7	4.6
第4問	2.3	5.7	57.5	26.4	8.0

表 8 平均点の予想

平均点予想 (N=87)		
	人数	割合(%)
～54	3	3.4
55～64	70	80.5
65～74	14	16.1
75～84	0	0.0
85～	0	0.0

表 9 総合評価

観点別および総合評価（％） N=87					
	劣	やや劣	普通	やや優	優
自然観	0.0	13.8	55.2	25.3	5.7
観察実験	0.0	10.3	47.1	33.3	9.2
深い学び	2.3	23.0	58.6	10.3	5.7
総合評価	1.1	6.9	55.2	27.6	9.2

表 10 全体の難易度の 10 年間の変化

年	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025
全体	適当	適当	適当	適当	適当	やや難 ・ 適当	適当	適当	適当	適当
	65%	65%	72%	63%	70%	48% ・ 44%	68%	71%	65%	58%
高校関係	適当	適当	適当	適当	適当	やや難 ・ 適当	適当	適当	適当	適当
	67%	67%	66%	74%	69%	47% ・ 43%	63%	71%	66%	60%
大学高専	適当	適当	適当	やや難	適当	やや難 ・ 適当	適当	適当	適当	適当
	74%	60%	79%	67%	71%	62% ・ 38%	70%	70%	46%	54%

表 11 総合評価の 10 年間の変化

年	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025
全体	普通	普通	普通	やや優	普通	普通・ やや優	普通	やや優	普通	普通
	55%	68%	65%	37%	52%	45% ・ 41%	46%	55%	43%	55%
高校関係	普通	普通	普通	普通	普通	普通・ やや優	普通	やや優	普通	普通
	54%	71%	72%	39%	55%	48% ・ 38%	48%	51%	42%	60%
大学高専	普通	普通	普通	やや優 + 優	やや優	普通・ やや優	普通	やや優	普通	やや優
	61%	40%	58%	67%	43%	46% ・ 46%	50%	55%	55%	46%

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

(1) 問題量・分野のバランス

問題量については、「適量」が 53% (77%/括弧内は昨年度，以下同様) で最多回答となっているが、「やや多」あるいは「多すぎ」とする回答が 46% (25%) 存在し、「やや少」や「少すぎ」が 1% (7%) であることに比してかなり多い。配点を与えられている回答数が昨年の 22 問から 24 問と 2 問増加している。最後のセンター試験であった 2020 年度は、「やや多」あるいは「多すぎ」とする回答が 16%、「やや少」あるいは「少すぎ」が 5%であったことと比較すると、問題量が多いと捉えられていると言えよう。また、適量と回答した人の多くは、訓練された受験者の解答スピードを考慮していると考えられ、じっくりと考察するには時間が短い、すなわち、問題量が多めである傾向は否めない。また、令和 7 年度の「共通テスト問題作成方針」にあるように「(前略) 観察，実験，調査の結果などを数学的な手法等を活用して分析し解釈する力を問う問題や、受験者にとって既知ではないものも含めた資料などに示された事物・現象を分析的・総合的に考察する力を問う問題」であれば解くのに時間を要するのは当然である。

「分野の偏り」については、「特に問題ない」および「大変適切であるが」が 99%と大勢を占めているが、自由記述を見ると、分野の偏りはあまりないが、分野内の偏りが大きいことを問題視する声が複数寄せられている。また、後述の「各問について」で述べるように、各分野内での題材や設問の内容等について、問題視する意見もある。

(2) 難易度

「適当」とする回答が 58% (65%)，「難」が 1% (0%)，「やや難」が 39% (22%)，「やや易」が 2% (13%)，「易」とする回答は 0% (0%) であった。全体としては「適当」との評価であるが、「やや難」側にかかなりシフトしている。作問方針との関係については、「3. 総評・まとめ」で言及したい。

(3) 平均点

アンケート回答における予想平均点については、「～54 点」枠が 3% (0%)，「55～64 点」枠が 82% (69%)，「65～74 点」枠が 16% (29%) と、昨年度よりも得点が下がる予想となっており「55～64 点」枠に集中している。実際、今年度の最終集計の平均点は、58.96 点と昨年度の 62.97 点よりも下がっている。

(4) 学習効果への貢献度

センター試験から共通テストに変わった 2021 年度、大きく変化したのは、この項目であった。結論を先に言うと、「自然理解・科学的自然観育成への貢献度」については、共通テストになった初年度の評価は大きく向上したが、その後はセンター試験最後の年であった 2020 年度とほぼ同じか少し良いという状況である。具体的には、今年度は「普通」とする回答が 55% (46%，39%/括弧内は左が昨年度，右が一昨年度，以下同様)，「やや優+優」31% (41%，53%)，「やや劣+劣」14% (13%，9%) である。

「観察実験による科学的探究能力・態度の育成への貢献度」については、今年度は「普通」とする回答が 47% (30%，24%)，「やや優+優」43% (60%，72%) に対して、「やや劣+劣」10% (11%，4%) となり、「普通」と「やや優」の間という評価で、この 2 年で評価が連続して下がっている。

(5) 主体的・対話的で深い学びへの授業改善への貢献度

今年度は「普通」とする回答が 59% (51%，45%)，「やや優+優」16% (41%，45%)，「やや劣+劣」25% (17%，11%) となった。全体としては「普通」との評価であるが、この 2 年で評

価が下がっている。

(6) 問題の総合評価

総合評価については、「普通」55% (43%, 30%)，「やや優」28% (38%, 55%)，「優」9% (7%, 6%)，「やや劣」7% (10%, 8%)，「劣」1% (3%, 1%) となり，全体としても，各問の優劣度と同様に評価は下がり，「普通」に寄っている。

(7) 各問について

表 6 に示したように，各大問の難易度は，どれも最多回答は「適当」であるが，難易の広がりまでみると，第 2 問は，「適当」が 74% に対して「やや難」が 21% とやや「やや難」に寄っている。第 3 問 B は，「適当」が 51% に対して「やや難」が 44%，第 4 問は「適当」が 60% に対し「やや難」が 38% と，かなり「やや難」に寄っている。また，表 7 に示したように，各大問の優劣度は，いずれの大問も「普通」が最多回答で「やや優」寄りではあるが，第 3 問 B は，「やや劣」が 17%，「やや優」が 29% と評価が分かれている。各大問についての自由記述を参考に，検討を行った。

なお，回答者の優劣の判断基準が，必ずしも「共通テストの目的」に準じているわけではなく，むしろ受験生にとって取り組みやすいかどうか基準になっている可能性が高いことは指摘しておきたい。

第 1 問 劣・やや劣の割合が少なく，小問集合としてはよい問題だったと言える。小問集合といっても答えにたどり着くまでに複数のステップを踏む必要がある問題がほとんどで，60 分という試験時間を考えると適切ではないだろう。昨年度よりも「やや難」の回答が増えていることに反映されているといえる。また，問 2 や問 5 は，部分点の設定があっても良かったのではなかろうか。なお，原子分野については，小問での出題で十分であることを今回も指摘しておきたい。

第 2 問 自由記述を見ると，探究的な問題として良問であるという趣旨の回答が多かった。

第 3 問 A 優劣度の「普通」が最多回答であるだけでなく，「劣+やや劣」が今回最も少なかった問題である。「普通」という評価が最多になったのは，問 2 のような探究的な問題ではないオーソドックスな問題という意味で普通と評価されたためと考えられる。A と B に分けたことで，基礎的かつ適当な範囲で出題することができたのだろう。

第 3 問 B 優劣度の「普通」が最多回答であることは他の大問と同じだが，「やや劣」は他の大問に比して最も多かった。また難易度も「やや難+難」が 44.8% と今回の大問の中では最もその割合が大きかった。波の式（変位の式）が問題で与えられ，問題としての厳密さが担保されているが，それがかえって受験生にとっての難易度を高める結果となっているだろう。また，自由記述では問 6 への言及が多く，難しいという趣旨の意見が目立つ。60 分という試験時間では，十分に考える時間はなかったであろう。

第 4 問 難易度や優劣度の割合については，第 3 問 B ほどの偏りは見られないものの，自由記述を見ると，ポジティブな意見の数とネガティブな意見の数がほぼ拮抗している。コイルを扱った問 6 の前には図 3 として電流の時間変化のグラフが与えられているが，コンデンサーを扱った問 2 の前には電流の時間変化のグラフは与えられていない。教科書には，コンデンサーを充電するときの電流の時間変化のグラフは掲載されているものの，その理由の説明はない。問 2 は電流の時間変化が分からなければ解けない問題であるが，電流の時間変化を知っている受験生にとっては電流と電流が磁場から受ける力の関係を問われているだけの問題となる。共通テストの目的を考えれば，積極的に過渡現象を扱う必要はなく，第 4 問は同じテーマを扱うにしてももう少し別の問い方があっただろう。

3 総評・まとめ

今回のアンケート集計とその分析結果からまとめると、令和7年度共通テスト「物理」（本試験）は、問題の出題分野に大きな偏りもなかったものの、全体として量や難易度は過去の共通テストと比べ、受験生にとって厳しいものになった。高校現場における「物理」の学習で大事にされるべき観察・実験を通して身についた概念、原理・法則が、共通テストで問われるようにして欲しいという期待に近い形の出題は定着しつつあるといえよう。また、今年も会話文形式の出題がなく、それを評価する声が多かった。第3問がAとBに分かれたことで、幅広い分野から出題されたことも評価されていた。

なお、令和6年度の作問方針では「問題の作成に当たっては、受験者にとって既知ではないものも含めた資料等に示された事物・現象を分析的・総合的に考察する力を問う問題や、観察・実験・調査の結果などを数学的な手法を活用して分析し解釈する力を問う問題などともに、科学的な事物・現象に係る基本的な概念や原理・法則などの理解を問う問題を含めて検討する。」となっていた。それが令和7年度では「問題の作成に当たっては、基本的な概念や原理・法則の理解を問う問題とともに、観察、実験、調査の結果などを数学的な手法等を活用して分析し解釈する力を問う問題や、受験者にとって既知ではないものも含めた資料などに示された事物・現象を分析的・総合的に考察する力を問う問題などを含めて検討する。その際、基礎を付した科目の内容との関連も考慮する。」となっている。これを素直に読めば、昨年度と比べ今年度は「基本的な概念や原理・法則の理解を問う問題」（傍点、引用者）の出題を大前提としていたと理解できるが、実際の問題はそうはなっていない。むしろ難化し、2次試験化していると言え、問題であると考ええる。実際に平均点の低下という形でもあらわれている。

10年間の難易度変化を見ると、共通テストになった令和3年度だけが、「やや難」を「普通」が上回っている。センター試験に比べ、共通テストは難しくなったという評価であったが、その後の共通テストは程度の差はあれどもいずれも「普通」と評価されている。つまり、現在の共通テストもセンター試験と比べれば難しいはずだが、いまの共通テストがもはや「普通」となっているのである。アンケート結果を解釈する上では、この点に注意する必要がある。

令和6年度の「問題作成分科会の見解」では、「4まとめ」として「(3) 平均的な学力を持つ受験者が試験時間 60 分以内に全ての問題に取り組むことができ、また探究活動や思考力を必要とする問題に十分な時間を割けるような問題とする。」「(6) いわゆる組合せ解答問題では、共通テストから導入された形式での出題となるように配慮し、受験者の学習到達度をより詳しく見る必要がある場合には、部分点を与えることを検討する。」とある。しかし、令和7年度の問題は探究活動や思考力を必要とする問題に十分な時間を割けるような問題になっているとは言えず、また、部分点の設定もなかった。昨年度の見解が今年度の問題に反映されていないのは残念である。

なお、同じ冊子に化学などの他科目の問題も収められている。今回のように化学の平均点が物理よりも低い（ここでは、これを難易度が高いと呼ぶことにする）となると、物理の問題はなるべく短時間で解いて、第1解答科目の時間内に、難易度が高く回答に時間がかかる第2解答科目の問題に先に目を通すよう学校や予備校が今後指導する可能性もありえることは指摘しておきたい。

4 今後の共通テストへの要望

共通テストは「大学に入学を志願する者の高等学校段階における基礎的な学習の達成の程度を

判定することを主たる目的」とされているのだから、基礎的な問題が出題される試験であるべきであって、各大学の個別学力検査（２次試験）のような試験であるべきではない。「科学の基本的な概念や原理・法則に関する深い理解を基に、（中略）科学的に探究する過程を重視する。」という共通テストの問題作成方針は、もはや各大学の個別学力検査（２次試験）の出題方針に比肩するものである。実際、いくつかの大学のアドミッションポリシーと比較してみたが、共通テストの問題作成方針の方がむしろ要求水準が高いと考えられた。

60分で解き終わる問題量という制約下で、科学的に探究する過程を重視した問題を出題するとなれば、問題数は限られ、どうしても出題分野内における単元は偏ることになる。約14万人が受験する「物理」の試験として、受験生が運に左右されない試験であるべきである。特に、浪人生に比べ準備の時間が限られる現役生にとっては、大きな問題である。

「物理」は高3で履修することが一般的であり、「物理」を標準単位数で設置する学校の多くは、正規の授業ではない「夏期講習」を行ったり、生徒による実験を省略したりするなどして、無理をして全範囲を終わらせるか、生徒が自力で出題範囲の学習を終わらせる、というのが実態である。この点からも、1月に実施される共通テストが２次試験化することは望ましくない。かつての「物理IB」や「物理I」の時代から比べれば、出題範囲も広がっている。

また、今回も会話文形式の出題がなかった。一般的な表現ができるものをわざわざ会話文形式にすることは今後も避けて頂きたい。今年度から「情報」も出題され、受験生および学校現場の負担は増えている。少しでもそれぞれの科目の「基礎的な学習」をしっかりと見定めた試験となるよう検討を続けて頂きたい。